薩摩と異文化

2022年３月，23年ぶりに最初の赴任地である「南国」鹿児島を訪れた。薩摩文化の復習が訪問の目的の１つだった。

薩摩と言えば，薩摩焼を思い出す人が少なくなかろう。SATSUMA が西洋語に定着するごとく，朝鮮陶芸の影響を強く受けた薩摩焼は，400年以上もの歴史があり，薩摩が世界に知られるきっかけとなった。その代表格の薩摩金襴手が1867年のパリ万博に展示され，それまでのシノワズリ（中国趣味）を凌いだ，印象派などに大きな影響を与えたジャポニズムをもたらした。異文化接触に触れる際によく出てくる逸話である。

異文化接触を語る時，薩摩生まれの優れた画家たちへの言及は欠かせない。地元の美術館に足を運ぶと，「近代洋画の父」とされる黒田清輝，「日本の印象派」と称される藤島武二，「吾輩は猫である」等の装丁を手掛けた，「大正の歌麿」と呼ばれる橋口五葉など，数々の巨匠の絵が楽しめる。そこに収蔵されているマティスやシャガールの作品を目の当たりにしては，異文化を受け入れる薩摩人気質こそが近代美術の先駆者を輩出したのではないかと思えてくる。

薩摩における異文化接触は何も近代に限るものではない。律令国家に寄与した鑑真和上の上陸（753年）も，日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの来朝（1549年）も，そしてまた元宋明清各時代の中国陶磁の大量出土も，様々な「薩摩異文化物語」を織り成している。薩摩には「鎖国」の時代などはなかったといっても過言ではなかろう。

異文化との交流が脈々と受け継がれた結果，この地の産業化の実現も図られた。「集成館事業」を推進した島津斉彬という藩主がその立役者であった。漢籍を熟読し，蘭学も吸収したこの名君は，詩経の名句「思無邪（思い邪なし）」の書を諸侯に送ったというエピソードもあり，世界に目を向けたリーダーとして讃えられている。島津斉彬からの影響もあったのだろうか。近代日本の建国者としてよく知られる西郷隆盛も大久保利通も，相互教育，相互学習の形をとった「郷土教育」の中で，「近思録」などの古典を研鑽していたという。その座右の銘の「敬天愛人」も「為政清明」も東洋的語構成であり，文化的に共有される。

南の辺境の薩摩，海上交通の要所としての薩摩，雄藩の薩摩と，薩摩を飾る言葉は多い。中でも「開かれた薩摩」が薩摩の性格に最も相応しいもののはずである。鹿児島在住の老華僑が薦めてくれた「薩摩伝承館」を見学した後，指宿駅にあるベトナム物産店に立ち寄ってみたが，「鹿児島の人が親切」とベトナム人の店長が語った。薩摩はいまも開かれている。

３年も続いた世界規模のコロナ感染の中にあって，グローバルの終焉と呟くのを耳にしたことがあるが，鹿児島中央駅の広場に高く聳えている「若き薩摩の群像」を仰ぐと，困難な時代だからこそ，よく世界を知り，他者を理解するという異文化的態度が肝要ではないかと思ってやまない。

広島大学マネジメント学会 会長
盧　　濤
2023年初春東千田キャンパスにて